

卒論

「女殺油地獄」について

—二つの特異性を中心として—

浦中博子

目次

序

本論

第一章 「殺人」について

第一節 姦通物の場合

第二節 「淀廻出世滝徳」の場合

第三節 「女殺油地獄」の場合

第二章 主人公与兵衛の性格について

第一節 伊左衛門、与次兵衛、勝二郎、徳兵衛、忠

兵衛の性格

第二節 与兵衛の性格

第三節 与兵衛の特異性

結び

序

近松門左衛門が、浄瑠璃、歌舞伎作者として劇壇に姿を現わしたのは、年号でいえば天和、貞享年間にあたり、それはまた、町人の経済生活が上昇をたどり始めた時期でも

あった。しかし、正徳四年を境に、幕府の緊縮政策が徐々に強化され、興行物に対する制限も行なわれ享保八年には、心中物の刊行、上演も禁止されている。そして近松は、この頃最晩年を迎えるのである。

近松の作品は、時代物と世話物とに大別されるが、ここで扱かうのは、元禄十六年から享保七年まで二十年に渡って発表された世話物である。戯曲の本質に基づく分類から、近松の世話物二十四篇は、心中物・姦通物・犯罪物・殺人物・狂乱物・傾城物・準傾城物の七つに分類することができるが、そんな中で最も異色ある作品として知られているのが、享保六年、六十九歳の時に執筆された「女殺油地獄」である。

この作品が、「異色ある」といわれる所以は、主人公が性格破産者として描かれていること、また「殺し場」が最大の見せ場となっていることにあると思う。

では、なぜ近松は、晩年になってこのような作品を書くに至ったのだろうか。近松が表わしたかったものは、一体何なのか。それを探るべく、第一章では「女殺油地獄」に

おける「殺人」の特異性を、そして第二章では主人公与兵衛の性格の特異性を、それぞれ他の作品と比較することによって明らかにし、考察を進めていきたいと思う。

本論

第一章 「殺人」について

「女殺油地獄」の素材は、「強盗殺人」であり、この「殺人」を取り扱ったものは、近松の世話物二十四篇中、四例である。

作品名	著作年代	作者年令	分類
堀川波鼓	宝永四年(一七〇七年)	55歳	姦通物
淀鯉出世滝徳	宝永五年(一七〇八年)	56歳	傾城物
鐘の権三重帷子	享保二年(一七二七年)	65歳	姦通物
女殺油地獄	享保六年(一七二二年)	69歳	殺人物

以下、それぞれの「殺人」について考察を進めていくことにする。

第一節 姦通物の場合

人妻の不義密通を題材とする姦通物の最初の作品は、「堀川波鼓」で、この十年後に「鐘の権三重帷子」が執筆されている。

当時の封建制下においては、不義密通は、女にとつて最大の恥づべき罪であり、直ちに容赦なき制裁の加えられたことは言うまでもない。即ちそれが女敵討の風習である。つまり姦通物の「殺人」は、女敵討としての「殺人」ということになる。そのため世間的にも認められたものであり、

行為そのものさえも讃えられている。しかもこの場合、殺される人物は決まっているのである。

第二節 「淀鯉出世滝徳」の場合

傾城物に分類される「淀鯉出世滝徳」では「殺人」の様子が少し違ってくる。

恋しい男がありながら、身請けされるいやさに、そしてまた、男の窮地を救うために、「二階の客を刺し殺せば明日の難儀をのがる得。金を取れば勝二郎さまのおためになるこれが得」という女の浅はかな考えから、「殺人」が行なわれてしまうのである。

しかし、この場合、金を盗むというのは、第二の目的であり、第一の目的は、自分が身請けされるのを阻止することである。そのための「殺人」であって、殺されるのは藤という男であり、姦通物と同様、殺される人物は定まっている。

第三節 「女殺油地獄」の場合

先の三例が、姦通物、傾城物に分類されるのに対し、殺人物に分類される唯一の作品であり、この四例のうち最も晩年に書かれた作品でもある。

では、晩年の「殺人」は、どのように変化したのでろうか。

主人公与兵衛は、借金の返済に窮して、豊島屋のお吉を殺害し、有金を奪って逃げる。このように、「殺人」の目

は強盗であつて、そこには深い事情もないし、殺される人物もお吉である必要はなく、金を持っているなら誰でもよいということになる。つまり、お吉には殺される理由がないといえる。与兵衛の「金払うて男立てねばならぬ」という一方的な理由のために、お吉は殺されてしまうのである。

以上四篇の「殺人」のうち、姦通物には、女敵討という立派な理由があるし、「淀鯉出世滝徳」にも、身請の阻止という理由が存在していた。それに、殺される人物も決まっていた。

ところが「女殺油地獄」は、あくまでも「強盗殺人」であり、そこには少しも同情の念はおきない。しかも、殺される人物は、お吉に限らず、金を持っているなら誰でもよかった。お吉は、そのための一人の人間に過ぎなかったのである。

また、先の三例は、上・中之巻が、下之巻の「殺人」を生み出すように仕組まれて、上之巻から、中之巻、下之巻というように、順を追って構成されており、結果としての「殺人」であるのに対し、「女殺油地獄」は、上・中・下之巻が、対等の関係にたち、多少のかかわりはあるにせよ、上・中之巻の事件が、下之巻のお吉の悲劇―殺人―を生ずるといふような性格のものではない。つまり、過程の中における殺人であると言えらると思う。

晩年の「殺人」が、結果としてではなく、戯曲の中心として組み込まれたということは、とりもなおさず近松が、

「殺人」を、ひとつの見せ場として、その位置を確立させたからではないだろうか。

第二章 主人公与兵衛の性格について

第一章で、晩年における「殺人」の変化を他の作品と比較しながら考察を進めてきた。ここでは、与兵衛の性格を他の世話物の主人公と比較して、その特異性を明らかにしたい。与兵衛が、油屋の実子であることから、比較の対象として、同じく商家に生まれた「夕霧阿波鳴渡」の伊左衛門、「山崎与次兵衛寿の門松」の与次兵衛、「淀鯉出世滝徳」の勝二郎と、手代である、「曾根崎心中」の徳兵衛と、養子である「冥途の飛脚」の忠兵衛の五人を取りあげてみた。

第一節 伊左衛門、与次兵衛、勝二郎、徳兵衛、

忠兵衛の性格

伊左衛門、与次兵衛、勝二郎の三人は、共に富裕な町人の子であり、いかにも大尽らしい豪語や遊蕩的浪費性は相通じるものがある。

その中でも、最も大尽らしい鷹揚な人柄を示しているのは伊左衛門である。勘当されて紙衣の落ちぶれた姿になつても、一向に昔の若旦那ぶりはなくならず、元禄上昇期の上層町人らしい様子は随所に伺がわれる。しかし、そのような伊左衛門も、中之巻の最後では、自分の過去を深く反省し、「昔の栄耀程憂目を見ねば罪消えず」とまで改心す

る。それに、放蕩性から勘当の身となったものの「源之介への愛情」また「夕霧への愛情」に、「人間らしさ」を見出すことができるのである。

与次兵衛は、「粹の粹をこえたる恋の山崎与次兵衛」という言葉でもわかるように、その遊蕩性は見逃せないとしても、一方では与平の罪を自分の身に引き受けて、男同士の義理を果たそうとする面も持ち合わせている。また親に對する厚い孝心も失つてはいない。

勝二郎は、浅慮さから悪手代にうまく丸め込まれて、忠義を手代を勘当してしまふのだが、事が露見した時には、我が身の愚かさを悟り、素直に自分の非を認め、真実後悔の涙を流す。

これら三人とは違った微妙な立場にあるのが、徳兵衛と忠兵衛である。

徳兵衛は、醬油屋の手代で、主人でもあり同時に叔父でもある久右衛門から、正直さを見込まれ、「内儀の姪に二貫目つけて女夫にし。商売をさせう」と言われる程の信用を得る。徳兵衛の正直さ、面子を重んじる姿は、信用第一の商人として考えたと納得のいくことであるが、主人の強要する結婚を退け、遊女との愛を貫き通す姿は、徳兵衛だけのものであり、ここに徳兵衛の強さをみることができ。しかし、心中の際には、主への恩義を忘れることなく、恩返しもできないまま死んでいく身を詫びている。

忠兵衛は、飛脚宿亀屋の世継で養子である。商売に關しては巧手て手友かりはなへなれども、唯ひとつの欠点が、

遊蕩性である。忠兵衛の理性を失つて、後の事を考えずに行動に走つてしまふ場面は、至る所に見ることができ、感情中心の弱い性格が表われている。しかし、その忠兵衛も、役人に捕えられた時には、潔きよく罪を認めて、親に嘆きをかけることが心残りと言っている。

以上、五篇の世話物の主人公をみてきたわけだが、伊左衛門、与次兵衛、勝二郎の三人には、我儘な遊蕩息子の一面向が表われており、生来の大尽らしい様子が伺われる。しかし、決して根っからの不良ではない。

また、最後の方では、自分の過去を深く反省し、悔悟の涙を流して、親への詫言を述べている。そして、そこに至るまでの主人公の内面的変化には、少しも不自然さは感じられず、むしろ、観客の涙を誘うものである。

この三人に對して、徳兵衛、忠兵衛の二人は、手代と養子という身分柄、態度が謙虚であり、商人として何ひとつ申し分のない性格なのであるが、遊女と深く馴染んでいるところの問題があり、悲劇も、それが原因となつて生じている。この二人もまた、最後には、主と養母に詫言を述べている。

この五人の主人公に共通しているものは、「人間らしさ」である。「遊女との愛」に、「男同士の義理」に、或いは「親、主への恩義」に、「人間らしさ」をみることができ。そして、そのことは、反省の言葉の中にも、よく表わられていた。

第二節 与兵衛の性格

では次に、与兵衛の性格をみてみよう。

与兵衛の家庭は、養父徳兵衛が番頭上りであることから、両者の間には、特別な親子関係が成り立ち、また実母お沢も微妙な立場にいる。その上、万事申し分ない真面目な兄と異父妹のおかちがあり、この複雑な事情が与兵衛の性格に強く影響していることは言うまでもない。

与兵衛の不良の性格は、次の六つの言葉によって端的に示されている。

1. どころめ（どら息子）
2. どころく者（道楽者）
3. のらめ（のらくら者）
4. 無法者
5. ごくだう
6. あんだらめ（おろか者）

これらの言葉は、いずれも人間を表現するのに最低の言葉であることがわかる。このことから与兵衛は、人間として最低のところ位置する人間と言えよう。

また与兵衛は、「生」に対する執着が非常に強い人間であり、殊更男としての面子を強調する反面、世間に対しては頗る弱い人間でもある。

与兵衛は、このような小心で臆病な不良青年から、切羽詰まった状況により一変して殺人、強盗の犯罪者になるわけだが、要するに与兵衛という人間は、「自己中心」の考

え方しかできず、「義理も情もない」、しかし、「腕力や法律には恐れをなす」近代的不良青年として描かれている。

だがこの悪人でも、やはり最後には健気な自白をしている。しかし、その自白についても多少の考察をする必要がある。

従来、「女殺油地獄」論は、主人公与兵衛の性格の把握の仕方によって、大別して二つの対照的な系列に分かれている。その分岐点となるのは、放埒の限りを尽くしてきた不良青年が、お吉を殺す時点までに、内面の変化を経験したか、どうかというところにあった。

そこで問題となるのが、下之巻初めの豊島屋での、両親の愁嘆の後で、与兵衛がお吉に向かっていう次の言葉である。

いや、隠さしやるな。先から門口に蚊に食はれ。長々しい親達の愁嘆聞て。涙をこぼしました。

この言葉の解釈をめぐって、意見が二つに分かれている。すなわち藤村作氏は、この場面においては、与兵衛は「心状の変化」を経験しておらず、これが、そのまま最後の自白にまで及んで、この自白さえも「彼が自白も切羽詰まったの自棄的の自白で、悔悟、懺悔の自白ではない。」とされて、最後まで与兵衛を悪人とみておられる。

一方坪内逍遙は、与兵衛が「内面の変化を経験した」と考え、最後の自白の言葉は、その「心状の変化」から生まれたものとして、与兵衛の自白をともかくも信じた。この逍遙説をとる人は少なく、殆どの人が藤村説を支持している。

また諏訪春雄氏のように、「大罪を犯した本人が、最後になって罪を自白し、懺悔する筋は、近松作では珍しくない脚色法であった。」として、類型的趣向であることを指摘し、下之巻の切豊島屋の場が、お吉の成仏を祈る浄土和讃で始まることと考え合わせて、「最後の与兵衛の捕われと悔悟は予定調和として準備されていた。」と説く人もある。

私は、下之巻初めの豊島屋の場面においては、与兵衛は改心をしたとは考えられない。あの時点で改心をしたなら、その後の殺人事件は起こり得ないと思うからである。また、殺人を犯した後、がたがた震えながらも、懐に金をねじ込み

此の脇差は梅檀の木の橋から川へ。沈む来世は見えぬ沙汰。此の世の果報の付き時と内を抜出で一散に。足に任せて

廓へと走るのであるが、このような行為も、もしあの豊島屋で、「心状の変化」を経験しているなら起こらない筈である。従って、私は、与兵衛の「心状の変化」は、最後の自白においてであると考えるのが妥当だと思ふ。

坪内逍遙は、豊島屋の場面で与兵衛が、「内面の変化を経験した」と考えた。しかし、先に述べた理由から、逍遙説には同意しがたい。

最後の自白についても、諏訪氏の意見は、最もではあるが、井口洋氏も、「そのこと自体はまことに有益であるが、類型一般に解消されて、人物の性格の一貫性、ひいては近

松の論理が見失われることがあつてはならないだろう。」と述べておられるように、その類型性や宗教的色合に感わされて、本質的なものを忘れてしまつてはならない。まして、最後の自白までも、「自棄的の自白で悔悟、懺悔の自白ではない」とする藤村氏の説には賛成できない。

「一生不孝放埒の我なれども。」で始まり、「仇も敵も一つ悲願南無阿弥陀佛」で終わる、この自白があるからこそ、それまでの暗いイメージから、観客はやつと救われるのである。また、そうすることが時代の要求する倫理的欲求であつたのであり、近松の作意であつたと考える。

第三節 与兵衛の特異性

第一節において、五人の主人公の、それぞれの性格を考察した結果、社会的身分によつて性格の異なつてゐることが明らかになつた。そして与兵衛は、この五人と遊蕩的浪費性、短慮という点では一致しているが、その他の点では性格を異にしていることもわかつた。つまり与兵衛は、近代的な不良青年として描かれてゐると言えよう。決して生来の悪人というわけではないのだが、その行為には「人間らしさ」がみられないのである。そして、与兵衛が人間らしく生きようと悟つた時には、もうすべてが終わつていたのである。

藤野義雄氏は、「近松の世話悲劇」の中で、二枚目役の性格について、「性格的特性は殆ど同一であり、ただ境遇や身分に特別な条件をもつ若干の人物に、個性的な特色が

身分によつて個性を定めるのでなく、その人物が、ある特定シチュエーションに追い込まれた時の反応の仕方、或いは、行動によることが大切である。

つまり、彼らが自分自身の位置を決定するのは、状況に對していかなる行動を為すかにあると言えよう。

今、ここに取り上げた六人の主人公は、その状況に對して、各人が種々な行動を為して彼ら自身の位置を確立している。

「女殺油地獄」の与兵衛に至つては、「殺人」という行動に走つてしまふのである。この点において、与兵衛は与兵衛としての位置を確立している。

しかし、ここで大切なのは、「殺人」という行動そのものよりも「殺人」に至るまでの与兵衛の性格の描写、またお吉に借金を申し込む姿から、一瞬にしてお吉に殺意をもつ、その殺意のとらえ方にあると思う。

つまり、商家の我儘な不良息子を主人公とすることによつて、その主人公が、周囲の愛情に見守られながらも、「殺人」を犯すに至るまでの追いつめられた気持ち、養父徳兵衛と実母お沢の与兵衛に寄せる愛情と対照させながら描写し、一度は改心したかにみせかけ、また、それを否定し、そして最後には自白をさせる、というように、「内面の変化」に重点が置かれているように思う。

近松は元禄十六年から、享保七年に至るまでの間に、二十四篇の世話物を発表した。その世話物中、唯一の「殺人物」として分類される「女殺油地獄」について、特異性を中心に論を進めてきた。

晩年になつて、殺人物は、真に殺人物としての色合を濃くし、それ自体が、ひとつの見せ場となつて観衆の前に姿を現わした。しかし、近松は、一方では「殺し場」の位置を確立させながらも、「殺人」に至るまでと、豊島屋での「長々しい親達の愁嘆聞いて。涙をこぼしました。」という言葉の矛盾からくる心理状態、殺害後の行動、そして最後の自白と、内面の変化を十分に描ききつてゐる。そこに近松の作意があるように思う。

この後、近松の世話浄瑠璃としては、最後の「心中宵庚申」が残っているだけである。この作品では、義理堅い男が主人公となつており、劇の中心に据えられているのは、義理である。

「女殺油地獄」は、破産者の性格の人物が、主人公であつたという点において、やはり特異であると言わねばならない。